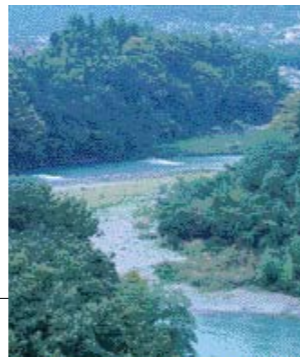


# 「風景/画 うまれるとき —見晴らしフレームで描こう」

2008年10月10日(金)会場：青梅市立第七小学校(同校5・6年生限定授業)

11月9日(日)会場：釜の淵公園

ワークショップメンバー：母袋俊也 清水鮎美 松本菜々 森智沙帆 山根一晃 横山大河  
サポートメンバー：榊原英祐 佐藤翠 鈴木知佳 高橋和臣 橋本直明 村上真之介



様々なフォーマットの窓を切り抜いた見晴らしフレームで風景を切り取り、絵を描き、絵の生まれる瞬間、起源を考えるワークショップ。  
参加者は、母袋俊也(東京造形大学教授)と東京造形大学学生、第七小小学生、及び一般参加者。  
そこで制作した作品は「ワークショップ報告展」として青梅市立美術館市民ギャラリーに展示された。  
なお、第七小学校におけるワークショップは「交流教室」として行われた。



## 交流教室

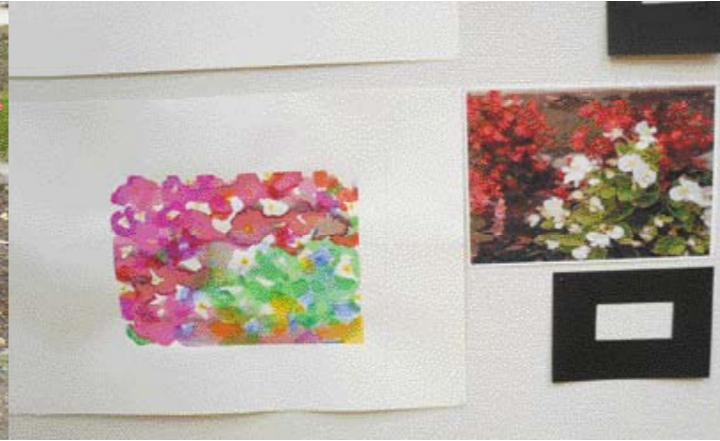
青梅市立第七小学校5・6年生49人が参加した。  
フレームを通して目の前の風景を切り取り、それを写して絵に描く。



第七小学校で説明する講師の母袋俊也



“見晴らしフレーム”を覗いて構図を決める



フレームで構図を決めた後、描かれた児童作品



参加者の作品展示 テーブルの上は箱型の“見晴らし BOX”

## ワークショップ「風景/画 うまれるとき —見晴らしフレームで描こう」に思う

母袋俊也

ワークショップは、本展開催前の10月10日(金)青梅市立第七小学校5,6年生を対象に、その後、会期中の秋も深まる11月9日(日)に一般を対象に釜ヶ淵公園で、2回にわたって開催されました。  
13×19cmの黒ケント紙に好みの比率の窓を開け、フレーム越しに風景を描く本ワークショップ「風景/画 うまれるとき —見晴らしフレームで描こう」は、僕自身の《TA系絵画》と《絵画のための見晴らし小屋》との相関を基盤として発想され何回かの実施を経て改良を重ねられているものであり、ワークショップメンバーは母袋、東京造形大の学部生、院生5名によって構成され、学生展出品の造形大院生6名もサポートメンバーとして、フレームで切り取り風景を描く制作をしました。

そもそも、このワークショップは、絵を描く楽しみの享受を目的とするのではなく、“絵の発生と絵の意味=役割”を考え始める契機となつてほしいという僕の願いから設定されたものでありました。

そのため導入は、絵についてのやっかいとも思える話からはじめられました。絵の持つイリュージョン性、そしてアイコンの視覚の双方向性、風景との連関・・・それは小学生にむけてのメッセージとしては難解さと時間も要したものでした。しかし不安だった僕の眼には、レクチャーする僕の眼の奥を覗き込むような、咀嚼力と集中力を備えた児童たちの眼差しが今も焼きついています。

その彼らの視線はそのまま風景にそそがれました。そして普段見慣れている風景は、切り取られたフレーム越しに捕えられ、徐々に画用紙の余白を背景にそのフォーマットを個性に満ちた絵として顕かにしてい

きました。その作品はワークショップ終了後も昼休み、放課後に描き続けられたと後で聞きました。

それら力作は、11月18日から24日まで報告展として青梅市立美術館に作品、フレーム、そしてその対象となった風景写真を1セットとして壁面いっぱいに展示されました。それは正に個性豊かな風景で壁面が充満したかのようでもあり、他の壁面に展示されたワークショップメンバーの絵画作品とともに風景の、そして絵画の多様さをポリフォニックに示すものになりました。

これらの作品は、風景の多様さと、日常眼にしている風景が切り取られるフレームによって一変し、眼前の風景の大切さと、主体的な僕らの眼こそが風景を構成し風景/画を構築していくことを、そしてその風景の中に僕らの生があることを実感させてくれたように思えました。

また、普段専門性の中で美術していくことを常としている僕らは、参加者の方々、第七小学校のみんな、鈴木世喜子先生ほか異なるかたちで美術を生きる多くの人たちとの共有体験の中、改めて美術のあり方の多様さを、また専門性が故に招く現実からの遊離感からか時に懐疑的な思いにもなりがちな“美術の正しさ”を再確認することができたことが何にも増しておおきな出来事であったように思っています。

ワークショップ、報告展を終えた今、この体験がこれからの人たちに何かを繋げていくことができたのであれば強く思うのですが、応えを急いではいけなは僕らが日々格闘する作品と同様なのでしょう。

2008.12 藤野にて



母袋俊也



山根一晃



清水鮎美



森智沙帆



横山大河



松本菜々